

「子どもへのまなざし」設立 5 周年記念講演会特集

12月7日(土) 佐々木正美先生 をお迎えし、講演会を開催しました！

参加者の声

忘れていた子育ての基本を聞かせていただきました。教育者ではなく保護者になる、が心に響きました。(J.I/8才の母)

遊びが何より大事ということがよくわかった。学校帰りに塾ばかりに行く今日の社会を疑問に思っていました。そんな遅くまで勉強して…んーと感じていました。我が子には子ども時代は思う存分に遊ばせます！！（1才の母）



人間同士の交わり、子どもにとって、そして大人にとっても大切なこと、改めて実感しました。人の関わりをしていくことを、自分も楽しみにしたいと思います。

(F.S/3才の母)



自分が親として他人にどう思われるかを気にして、子ども達が子どもらしくいられることを制限してしまっているなと思いました。子どもが子どもでいられる間に、好きなことを思いっきりさせてあげるのが親の役割なんだと心に残る言葉でした。(K.N/9,6,4才の母)

人と生き生きと親しく ～子どもの心を育むために親との

子どもにとっての遊びがどれだけ価値があって大切なことか！大人は遊びと勉強、遊びと仕事を対極において考える遊びを価値の無いものと考えがちです
どんでもない間違いであります
勉強は勉強したくなった時にやればいい

大切なのは、友達と交わること。
子ども時代に親しく交わる、ということは友達と楽しく遊ぶということです
自分で大きくなって、家庭を持った時に家族と交わることの力となる
社会に出て仕事を通じて
職場の人と交わることの力となる
勉強できなくても、友達ととことん遊んでいる
そうできれば、もう、人間としては十分に成長しています



人間は社会の中で人間関係を 営みながら生きていくんです

人間は人間的な他者を持って初めて自己の意味を実感する
共感できる他者、相手、親、友達、
そういうことを持って、心が育つ
何がどれだけ出来ても
人間関係の中など意味がない
人は人と交わりながら生きていく
社会的な存在なのです

繰り返し先生がおっしゃっていた子ども時代の遊びが大切、よく心しておきます。「人間関係の中で自分の価値を見出す」というのもその通りと思いました。(3,0才の親)

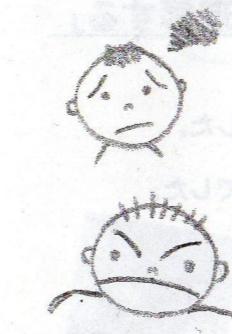
「支え合い育ち合う子育ての場を創ろう」と、佐々木正美先生のロングベストセラー「子どもへのまなざし」からお名前を頂き、団体を設立してから5周年目を迎えた今年、念願の佐々木正美先生をお招きし、5周年記念講演会を開催しました。佐々木先生は、臨床精神科医として、子どもの育つみちすじについて30年以上にわたり研究されてきました。午前中に開催された第1部は260人の方が熱心に佐々木正美先生のお言葉に耳を傾け、貴重な時間となりました。今回は、先生の講演会でのお言葉の一部と、参加した皆さんのお声をご紹介しながら当日を振り返りたいと思います。

交わる大切さ

関わり・友達との関わり～

コミュニケーションとは…

単なる会話ではありません
喜びや悲しみをわかちあう力です
一緒に喜び合うことです
感情をわかちあうことです
その後、相手と悲しみも分かち合えるんです



あなたはあなたのままでいいよ、
といってやる力
私が産んだ子ですよ、
良い子であるはずにきまっているでしょう
心から思ってくださいね
家庭で喜びを分かち合える経験を
たくさんしてほしいです

**やりたいことを
思い切りやるのがいいことです**
こういうことが好きだ、ああいうことが好きだ、
ということをはっきりと感じることが大事
好きなことが見つからない寂しいでしょ
好きでやる
好きでやるのがいいですよね
思いっきり好きなことに打ち込んで、
親が、世間が、どう感じるかではなく
本人が打ち込めることができるとかく大事です



子育てをする中で母自身が母であることにも窮屈に感じてしまったり、自分自身を自分で受け止められなかったりする。

そんな時はとてもやさしい母性にはならない。そんな時、どうしたらいいのか？母自身が交わることに慣れていないから、今、子育てが苦しいのか…？(Y.N/3才の母)

子どもの遊びがいかに大切か、共感しあうことの意味、それがその子の成長形成に大きく関わることがよく分かりました。リラックスできる家庭づくりを心がけよう改めて思いました。(A.N/5才の母)



子ども時代を楽しく活き活き過ごせなかつた子どもはどのように直していくべきか、先生にお伺いしてみたいのです。(匿名希望)

今の子育てのことだけでなく、自分自身がどのように育ってきたのかを考えてみたいになりました。(匿名希望)

いろいろな情報に振り回される毎日で頼れる人もなく、苦しんでいました。あなたはあなたのままいい、という言葉がすごく胸に刺さりました。子どもに対してだけでなく、自分自身にも響いた言葉でした。(N.N/6,3才の母)

